

家庭科

浅田幸子

1 家庭科の本質について

家庭科では、教科の本質を次のようにとらえている。

家庭生活の意義を理解し 家族の一員として暮らしを高めようとする事

家庭は、家族が互いに尊重し合い協力し合ってよりよい生活を営んでいこうとしているところである。子どもは家族に支えられ衣食住に関する生活をしたり人と接したりしながら無意識のうちに必要なことを身につけ、生活自立の基礎を培っている。しかし、今の子ども達は生活経験の不足や人間関係の希薄化から、自分の暮らしに対して無関心だったり無気力だったりして自らよりよい生活をめざしていこうとする態度に欠けているようである。そのような子ども達に、家族の一員としての自覚を促す家庭科の役割は大きいといえる。

「家庭生活の意義を理解し」とは、子ども一人一人が自分の暮らしを見つめ直すことによって家族への思いを新たにしたり、毎日の自分の暮らしが意義深いものであること認識したりしていくことである。家族や家庭生活に対する思いが深まることによって、子どもは自分も家族の一員として力を発揮したいと願うものである。

また、「家族の一員として暮らしを高めようとする」とは、子ども自身が生活の主体者として子どもなりの思いを描いて問題を解決したりよりよい暮らしをめざしたりして実践を続けようとする事である。

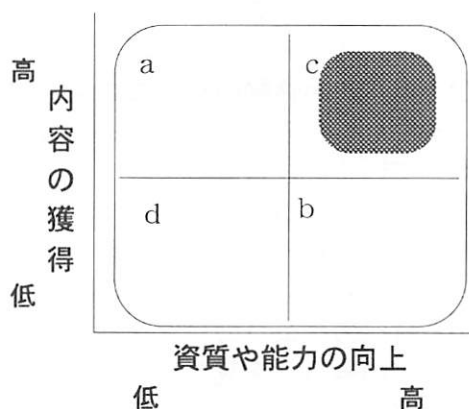
このように、家庭科では家庭生活に対する見方・考え方を深めながらよりよい暮らしをめざす実践的な態度を育てることを大切にしていきたい。社会の変化にともない家庭の機能は縮小してきていると言われているが、よりよい暮らしをめざす生活の主体者は、将来においても自分の家庭を大切にすることにつながると思う。

2 家庭科の「学び」について

家庭科で扱う内容は、子どもの家庭生活における衣食住などに関するできごとや家族とのかかわりである。家庭科では、衣食住などの生活が意義深いと感じ取ったり、日常生活に必要な基礎的な技能を習得したりする過程で、よりよい暮らし方を学んでいく。

また、内容面の獲得だけでなく、一人一人の子どもの身につき生かされる資質や能力面としての、暮らしを高めたいと願う意欲、さらに自分の願う（考えた）暮らしを実現しようと創意工夫したり計画を具体化したりする思考力の向上も重視していきたい。

内容の獲得と資質や能力の向上をめざすことが、実践的な態度を育むことになると考えると、学びの構造図は右図のようになるだろう。



3 本質にもとづく基礎・基本について

家庭科の基礎・基本については、衣食住などに関する知識の習得や技能の習熟を図ることだけでは考えていない。家庭生活との関連ある場面で子どもが自分なりに考えたり、試したり、判断したりして主体的に工夫し解決する能力を身につけることも大切であると考えている。

例えば、「目玉焼きを焼く」という技能は、フライパンを使って卵を焼くことは共通しているが、どのように焼くかは、子どもの思いによって一人一人違うのである。「白い膜がはったように焼きたい」「固く焼きたい」「黄身がとろりとしたやわらかめに焼きたい」など、自分や家族の好みを考え一人一人が調べたり考えたり、試したり工夫したりしながら意欲的に取り組み、自分の課題を解決していく力が大切なのである。

そこで、家庭科における基礎・基本を次のように考えた。

自分や家族のよりよい暮らしをめざし 主体的にかかわり 創意工夫しようとする事

家庭科の学習で、基礎・基本が獲得されることにより、子どもは小学生なりに一人の生活者として家族を思いやり、それぞれの暮らしを高めていこうとする生き方につながるものとする。

4 単元を構想するにあたって

家庭科における自己の学びを深めるとは、家族や家庭生活に対する見方や考え方の深まりを自覚し実践力を高めていくことであるとしてとらえている。

では、子ども一人一人が、家族や家庭生活への思いを変容させ、さらにはそれを実践に結びつける学びとは、どうあればよいのであろうか。実際の単元構想で考えてみる。

(1) 家族や家庭生活への働きかけを促す

子どもの家庭生活の実態は様々である。また、毎日の生活の場であっても興味関心の寄せ方は一様ではなく、多くの子どもは無意識に生活している現状である。そこで、毎日の生活では気づいていないことや見えていないことに対して関心を向けたり、調査、観察する期間を設けたりして、まず、自分の家庭生活を見つめることから始めたい。また、子どもにとって驚きや意外性のある身近な暮らしなどを用意して、共通の出会いを工夫し、それぞれが家庭生活に対する自分なりの見方・考え方を持てるようにしていきたい。

(2) 一人一人の素朴な思いや願いの表出を促す

自分の家庭生活をそれぞれが見直して気づいたことの中に学習のスタートがある。自分の目で改めて見つめることによりふだん何気なく生活していたことに対して驚きや共感、疑問などをもつであろう。また、自分でできるようになりたいという願望も生まれるであろう。その子どもの素朴なつぶやきを大切にすることが新たな自分の暮らしを作り出そうとすることにつながっていくと考える。そこで、個の思いや願いを表出できる場も設定していきたい。

(3) 実践的・体験的な場でお互いの見方・考え方の共有化を図る

まず、それぞれの追求意欲を大切にしたい。しかし子どもの家庭生活は様々であり、お互いに考えていることがまちまちで分かりにくかったり、実際の生活とかけ離れたものになってしまったりする恐れがある。そこで、実際に試してみたり、資料の収集や活用を図ったりする実践的・体験的な活動の場を設けながら、お互いの見方考え方を深め合うようにしたい。自分の見方考え方が他から認められることにより、子どもは自分の追求活動に自信を持つと思われる。

(4) 自己の高まりの自覚を促す

自分の暮らしを見つめた当初の思いが学習過程において変容することを自覚することは、暮らしの意義を認識することにつながると思われる。そこで、家庭生活に対する思いを記録に残しながら学習を進めたい。

また、学習したことを家庭で実践したときには、その様子を記録したり互いに交流したりする自己評価や相互評価を効果的に組み入れていきたい。人から認められたり家族から励まされたりすることで子どもの活動はさらに自信を増すと考える。

5. 実践例 —6年—

(1) 単元名 住まい方の工夫をしよう

- (2) 目標
- ・住まいの明るさや風通しに関心をもち、快適に過ごすための工夫について考えることができる。
 - ・涼しい住まい方を工夫し、実践しようとする。

(3) 指導にあたって

本単元の基礎・基本について

住まいは、人間が生きていくための基本的な生活空間であり、家族の生活が営まれている大切な場である。にもかかわらず、着ることや食べることに比べると関心は薄く無意識に通り過ぎていくことが多いと思われる。

私たちの身近な住まいを見つめてみると、そこには気持ちよく生活が営めるように、採光や照明が工夫されていたり、季節の移り変わりとともに快適な暮らしが作り出されたりしているのである。家を造ることを職業とでもしない限り、住まいについては考えることもないであろうと思われがちであるが、自分の住まいを身近に感じ、今の住まいをほんの少し工夫することで快適に暮らすことができるという意識を本単元で育てたいと考えた。

朝から気温が高い教室。しかし、子ども達は窓も開けずに朝の会を進めている。また、太陽がかげったにもかかわらずブラインドを降ろしたまま学習を続けている。こんな子どもの姿を時々目にするのは、それだけ住環境に

対して、無関心であると同時に、体験的に快適さを感じる機会が少なかったからではないかと思う。家庭においては尚のこと、住まいに関して主体的にかかわることはなかったと思われる。

こうした子ども達に、快適な住まい方への関心を高め、自分からかかわっていくことができるようにと考えた。明るさを数値的にとらえたり、夏らしい暮らし方を探ったりすることで、暮らしに対する見方・考え方は深まっていくと考える。

そこで、本単元においては次のことを基礎・基本ととらえた。

- ・効果的な採光の仕方や照明の仕方が分かること
 - ・風通しのよい住まい方が分かること
 - ・涼しい住まい方を工夫すること
- また、ここで培うことのできる資質や能力としては、
- ・部屋の明るさや風通しに対する興味関心が高まること
 - ・自分にできることを、考えたり工夫したりして涼しい住まいを作り出そうとする態度が身につくこと
- などが期待でき、主体的に学びながら家庭科の本質に迫れると考えた。

単元計画（総時数 6時間）

| 主な活動と内容 | 学びを深めるために |
|--|-----------|
| 1 壁の色などについて気づいたことを話し合う ・うすい色 白色が多い ・明るい 清潔感がある ・色は気持ちよく住むことと関係ありそうだ | ①② |
| 気持ちよい住まいについて考えよう | |
| 2 気持ちよい住まいの明るさについて調べる ・照度計で測る ・場所によって お天気によって違う (明るさの違いは どうして) ・日光がさしこむから ・照明をつけているから ・よい日光の取り入れ方 ・よい照明の仕方 | ③ |
| 3 気持ちよい風通しについて 調べる ・窓の位置によって ちがってくる (気持ちよい住まいを作ってみよう) ・グループで住居模型づくり | ③ |
| 4 夏を快適に過ごすための住まい方の工夫について考える ・金沢の夏は暑い ・室温を下げる 夏の電気消費量は高い (涼しい住まい方を工夫しよう) ・直射日光を防ぐ 風通しをよくする ・涼しい感じを出す ・住居模型で考えてみよう | ③ |
| 5 気持ちよく住もうための工夫についてまとめる ・家での実践計画 実践交流 | ④ |

学びを深めるために

① 住居や住まい方への働きかけを促す

子どもは、ひごろ家庭生活において住居や住まい方に主体的に関わることは少ないので、住まいに対しての関心は低く、問題意識も持ちにくい。そこで、生活見つめカードを前もって用意し、壁の色や窓の位置、夏らしい暮らしなどについて予め自分の目で見たり、家族に聞いたりする期間を設けたい。

② 一人一人の素朴な思いや願いの表出を促す

それぞれが自分の家庭を見つめ直して気づいたことを出し合うことから学習に入りたい。毎日の生活では気づかなかったことが、視点を持って見つめてみると意外な一面を発見できるものである。壁の色が主に白色であることや窓の位置など、具体的事例を出しながら様子を話し合うと同時に疑問に思うことも出し合って、解決への意欲を大切にしたい。

③ 実践的・体験的な場でお互いの見方・考え方の共有化を図る

住まいの学習は、食物や被服の領域と違って直接体験することの難しい一面がある。そこで、教室を家の部屋と考えて、条件を変えて測定をしたり、資料の活用を図ったり、模型で試したりしながら、住まいへの見方・考え方を深めさせたい。

④ 自己の高まりの自覚を促す

気持ちよい住まいに対する自分の考えを記録に残しながら、学習を進めたい。明るさ、風通し、その他の工夫など気持ちよく住まうために多くのことが考えられていることを実感するであろう。また、涼しい住まい方に関しては、実際に家で役立てたり、工夫して実践したりした記録を残し、実践交流の場で役立てたい。家族や他から認められることにより実践意欲はさらに増すと考える。

(4) 本單元における授業の実際と考察

気持ちよい住まいに対する考えが変容し、実践意欲につながっていったかを流れにそって考察していく。

① 単元の実際と考察

主な活動と実際の意識の流れ 6時間+課外

1 壁の色などについて気づいたことを話し合う

- ・白や白に近い色が多かったね
- ・どうしてだろう
- ・清潔な感じがする
- ・どの色にも合う どの季節にも合う
- ・明るい 気持ちよさそう

気持ちよい住まいについて考えていこう

2 気持ちよい住まいの明るさについて調べる

- ・白い壁と紺色壁の部屋では違うのかな
- ・どうやって調べよう→照度計があるんだ



住居模型で測定

- ・白い壁は308ルクス 紺色壁は68ルクスだ
- ・壁の色によってずいぶん明るさが違う
- ・かげができると 暗くなる

ア 活動1～3の段階

事前の生活見つめカードにより、子ども達は学校や家の壁の色が白または白に近い色が多く使われていることを、初めて知ったようである。この時点での子ども達の「気持ちよい住まいとは」に対する考えは次の通りである。

おそうじをしっかりとあり、ほこりをためてない。整理整頓をきちんとしてある。いないものといふものの区別がしてある。風通しがよい。

A児の記録

壁の色が自分の好みの色、または落ち着いた色。本壁などがかたづいていて、風が入ってくる。変なおいかしなほうがいい。

B児の記録

この二人のように「気持ちよい住まい」として自分の勉強している近くの清潔感を意識する子が38人中35人と大半を占めていた。これは、5年生の住まい領域の学習で、整理整頓とそうじが既習事項であるから、身の回りが整理されていて清潔であることの意識が定着しているのはうなずける。ここの段階では気持ちよい住まいに明るさが必要であることを意識してい

・他も調べてみよう



- ・教室窓際 真ん中
- ・テラス 廊下
- ・図書室
- ・屋外図書コーナー
- ・玄関 トイレ など

校内を測定中

- ・場所によって明るさが違う どうしてだろう
- ・たぶん日光だろう 照明によっても違う
- ・活動に適した明るさがあるんだ

(よい日光の取り入れ方 よい照明の仕方は)

- ・日光は明るくしたり 暖かくしたり 乾燥させたり 殺菌したり ビタミンDをためたりできるんだ
- ・なるべく多く取り入れたい 日光は安全で無限だから
- ・夜は照明だ 蛍光灯と白熱灯がある
- ・異なった感じを受けるので場所によって使い分けると良さそうだ

3 気持ちよい風通しについて調べる

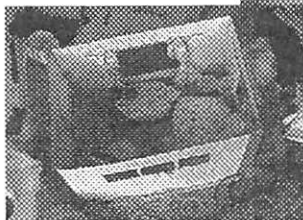
- ・窓の数 位置によって風の通り方が違う
- ・毎秒1mの風で 気温約3℃くらい下がる
- ・夏は涼しいほうがいい

(気持ちよい住まいを作ってみよう)

- ・段ボールでグループごとに住居模型を作ろう



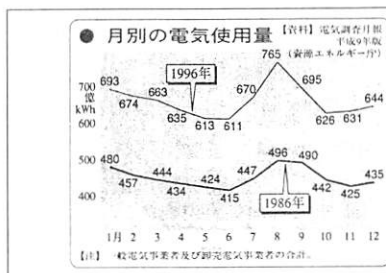
住居模型制作中



4 夏を快適に過ごすための住まい方の工夫について考える

- ・金沢の夏は 沖縄の那覇と同じくらい暑いな
- ・どうしたらよいだろう
- ・冷房を入れる アイスを食べる うちわであおぐ 風通しをよくする クーラーと扇風機をつける

グラフ



る子は、8人とまだ少数である。

壁の色によって部屋の明るさは違うのだろうかという疑問を解決するために、照度計を使つての体験的な場の設定をした。壁紙の違う住居模型で明るさの比較をした後、調べたい所を定め照度計を持って測定して回ったのである。明るい教室や暗そうな所を子ども達は生き生きと測定し記録していた。

日光を取り入れることについては家での体験を交えて考えを出し合った。寝室の東窓のカーテンを開けると目が覚めること、また、ふとんを家で干す手伝いをしたことのある子は、言われるがままにやっていたけれど意味のあることだったこと、など素朴な思いが出された。この時点でのA児、B児の「気持ちよい住まいとは」については、次の通りである。

日当たりをよくする。窓を南に作ったり大きくしたりする。そうするとたくさんの光や熱などを取り入れることができる。また、部屋を明るく保つ。壁紙は白。夜は広い部分を明るくできる蛍光灯がよい。トイレや階段などは白熱灯がよい。
気持ちよい住まいとは、家の造りからしてできていることが分かりました。それは、学校も同じ。窓の位置、大きさ、壁の色、毎日生活するところだからとても住み良く造られていて、これが当たり前と思っていたけれど、もう一度見直すと、たくさんのが分かりました。

A児の記録

壁の色が白。ほく落ち着く色で窓が南と北にあつて風通しがよく明るいこと。カーテンやブラインドがあつて光や熱が調節できて南にランタナがあること。ぼくは気づかなかつたけれど、本当は家にいろいろな工夫があつたことが分かりました。また、手伝いとしてやっていた戸を開けることや窓ふきなどが、実は住まいを良くすることにつながっていました。

B児の記録

窓の向きや大きさ壁の色など、かなり住まいの明るさについての考えが増えてきている。また、日光を住まいに効果的に取り入れることはこれまでも無意識に行われていたのであるが、それにも気づいたようである。

全体から見ても、明るさと風通しの大切な条件に38人全員が気づくとともに、すでに家は工夫されていたことに12人がびっくりしていることから、気持ちよい住まいに対する考えは初めに比べ大きく変容していることが分かる。

これらは、先に述べている①～③が有効に働

